

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	未開社会の親と子
Author(s)	海野. 悦子
Citation	茨城大学文理学部紀要. 人文科学(7): 13-23
Issue Date	1957-04
URL	http://hdl.handle.net/10109/10102
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

未開社会の親と子

—M.MeadのManus 族調査に拠つて—

海野悦子

I はじめに

私たちは誰でも家庭が子供の教育の最初の間であることを知っている。最近の研究でも早期(幼時)の教育がパーソナリティを形づくるうえに非常に大きな要因となることを明かにしている。⁽¹⁾ しかもその家庭という教育の間も、そこでの教育者たる両親や家族の性格や態度といったものも決してその社会の独自の特性(文化)と無関係では考えられない。つまり幼い子供たちに臨む親たちの態度にも、子供にあれこれと教える事柄にも、その教え方にも、その社会の文化はいろいろな程度に反映しているのである。こうした文化と教育との機能的な結びつきを知ることは大へん興味深いことなのだが、しかし私たちが日頃くらしている社会は非常に複雑で、種々の要素がいろいろ入っているから、それよりは生活の様式が単純であり、他の文化の影響もあまり受けていない未開社会を例にとつてその問題を考える方がずっとやり易いのである。こうしたことから多くの文化人類学者、心理学者たちが未開社会での実地研究に励み、すぐれた業績を次々と世に送つてきた。それらの研究者たちの中でも最も精力的な仕事をしている M.Mead 博士のマヌス社会での調査記録⁽²⁾を拠りどころとして、問題の焦点を親と子の関係—とくに親が子に接する態度—が子供のパーソナリティ形成のうえにどういう意味をもっているのか、またそうした親子関係はその社会の文化全体の中でどういう機能を果たし、他の文化特質とどのように関連しあっているものなのか、という点にあわせて考察をすすめてみたい。

II 経済的背景

Mead の研究の対象となつたマヌス族(Manus)はニューギニア北方、アドミラルティ島(Admiralty Island)の南海岸に沿つて礁湖の浅瀬に枕上の家建てて水上生活を営む、褐色の肌の漁師たちである。彼らは主に漁撈と交易で暮らしをたてているのだが、交易の重要さは単に生活の手段としてでなく、この社会のあらゆる面に、人間関係のうえにも、ここの人々のもつ価値の尺度にも非常に大きな意味をもっていることをしつておかなければならない。さて、彼らは獲つてきた魚で毎日のように近隣の他種族の人たちと取引をする。食料だけでなく、他の生活必需品もみな魚で買ひとるのである。アドミラルティ群島には全部でおよそ3万の人々がいるが、主としてそれを3つの文化区域に分けることができる。それらは更に幾つかの地方的部族にわかれており、それぞれ独自の経済生活を営んでいる。⁽³⁾ 全群島は共に相互依存と交易という網の目の中に組み入れられており、マヌスのカヌーは南海岸でのこの交易の主役を演ずるのである。彼らマヌス人の漁撈と交易とはこうした切つても切れない縁でつながり、その経済生活の支柱をなし、彼ら

をしてこの礁湖と岩礁の小さな世界に君臨する土地なき支配者たらしめている。

マヌス族は11の自治的な村落に散在する2千人の人口をかゝえている。その村というのがマヌスで見出しうる最も大きな行政単位なのであるが、それは個人が生まれてから死ぬまでそこに住まなければならないというような閉鎖的な集団ではなく、他村の人々とは婚姻等により相互関係をもつことができる。また彼ら自身も、近隣の種族とは異つた一つの言語と一つの文化を共有する一種族としての認識をもっている。個人をその村につなぎとめる絆は、本来的には彼を父方の氏族（Clan）に結びつけるそれなのである。その絆は氏族の靈魂（これは氏族を保持するのに共に関与していると考えられている）によつて強化されている。土地もなく、従つてその土地からの恵みも受けず、食料、その他の生活必需品を得るのに物々交換によらざるをえないマヌス族は、ほとほとこの苛酷な環境に手をやいている。富の蓄積も、絶え間ない労働や、他族との関係—交易という—から彼らを解放するものとはならない。マヌスはエスキモー（Eskimo）やオジブワ（Ojibwa）のように飢餓の脅威に曝されることはないけれども、彼らの状態は不景気下の低賃銀労働者のそれとよくており、食物もその他の物品もたしかに沢山あるが、食べていくためには余程激しい労働を必要とする。しかしマヌスはこの群島の住民たちのうちで最も不利な立地条件のうちにありながら、大きな社会的エネルギーを動員して、最も裕福な金持にのし上り、高度の生活水準を発展させたのであつた。

Ⅲ 家庭生活

マヌスの家庭に繰り展げられる生活の図は、私たちの社会のそれとはかなり異つた趣きをみせている。もちろんその成員に変わりはなく、父親、母親、1人か2人の兄弟姉妹、時には祖母も、ごく稀には祖父も加つている。⁽⁴⁾夕餉がすむと子供たちはマットの上、でまた大人たちの腕の中で安らかな寐息をたてはじめる。一見、互いに愛し合つている人々が火を囲んでの水いらずの一時であるかのようにである。

しかしよくみると多くの特異点が目につく。若い男たちは自分の家をもたず、兄や叔父の家の裏手に住んでいる。こうした場合、若い方の男の妻は年長の男の目に触れないようにしなければならない。彼が在宅している時彼女は居所へは決して入らないが、子供たちは自由に両家族の間を走りまわつている。しかしこうした年長の男を避けることや、名前を口にしてはならないことや、若い方の男が年長の男の世話になつているという事実が、ともするとこれら2つの家族間の関係に緊張の度を加える。マヌスは大体は父系家族で男は通常父または兄から家を相続し、妻は殆ど夫の居所へいつてくらす。

家族集団は小さく、親子（とくに父と子）の間柄は緊密であるのに対し、夫婦間とはげとげしい冷いものである。子供の目に映る父と母とは、お互いに子供を自分の味方にしようとして争つている対立した2人の人間なのである。夫、妻、それぞれの血縁関係はお互いの夫婦関係よりも強く、彼ら夫婦を互いに引寄せた因子よりも、引きはなそうとする因子の方がまさつているといつてよい。こうした軋轢の源は婚約から結婚までのいろいろな慣習に深く根ざしていることなのである。婚約と同時に、相手の姿や顔はおろか名前さえも口にするのを許されぬ若い二人は、結婚式の日に最高潮に達する夫々の親族の敵意と、この機会に一儲けをともしくろむ浅ましいその連中の利殖欲を背景に夫婦の契りを結ぶのである。

夫と妻とが別々の集団に属するという感じは結婚生活が続く限り伴うのであつて、永年の苦業を切りぬけて後、はじめてその感じが薄れるのであるが、それも決して消えさつて了うことはない。父母子が三位一体となり、温い緊密を保つて世の中に向うということにはならないのである。大抵の場合男は住みなれた自分の村で、自分の兄弟や伯叔父たちの側でくらす。この人たちは彼と最も密接な血縁関係にある人々であり、飢えた時に食を与えてくれるのも、病める時に看つてくれるのもこの人々である。彼らの守護霊は彼の守護霊であり、彼らのタブーは彼のタブーである。彼らに対してのみ彼は所属感を懐いている。

一方妻は彼にとって所詮他人である。自分でこの女を選んだのではないのだ。それなのに嫁とりの費用をだしてくれた人たちのために一日中働き、その人たちの前では頭も上らず始終肩身の狭い思いをなめねばならない。こうして彼からすればこの借金証書のような存在の妻を憎む理由が幾らもある。他所から嫁いできた妻にとっては、夫の周囲の人々は皆他人である。それなのに夫はその人たちに最も密接に結ばれているとあつては、若い妻も不機嫌にならざるをえない。新婚の生活も二人には夫々苦痛の連続なのである。こうした夫婦の関係はよく憶えておかねばならない。何故ならやがてこの二人が親となつた日、両親として子供に対する態度が私たちの知る親とはおよそ遠いものだからである。

やがて若い妻が妊ると、実家では祝いの宴会に必要な食物の準備にかゝる。しかし妻は夫に一言もしらせない。彼は義理の兄弟たちが金の用意をしているという噂を耳にし、自分の妻の妊娠をするのである。幾月かがたつて、その合間々に宴会が催され、夫はその返礼をしなければならぬ。彼の親類も援助してくれるが大抵は自分ですることになつてゐる。姉妹たちの処へいつて南京玉細工を作つて貰つたり、伯母たちや母にいろいろ頼みこんだり、何やかやと頭を低くし、気を遣うことばかりである。だのに妊娠している妻は家に坐つて実家の兄弟たちのために南京玉細工を幾ヤールも作つてやつてゐるのだ。夫婦間の溝はこれでまた一層深められる。

陣痛がはじまると夫は妻をみる事ができない。まる1月の間、今日は姉の家、明日は妹の家と泊つて歩き、家の近くに立寄ることも許されない。その間母親は赤ン坊の世話で手一杯である。1ヶ月の間は幾つかのタブーを守りさえすれば、病人として遇され機嫌もとつてもらえる。夫を愛することを覚えていないので、夫のいないことも一向に淋しいとは感じない。彼女は赤ン坊を胸に抱き、その小さい腕に唇を押しつけ、それは幸福なのである。というのはこの期間中だけが母親が子供を完全に独占できる時だからである。

やがて出産の大宴会、妻がまた夫のもとへ帰るお祭りがすむと、母と子の生活はこゝに一変し、父親が俄かに大きな存在としてその間に割りこんでくる。父親は子供の所有者として並々ならぬ関心の程を示します。それは彼の子供であり、彼の血族に属し彼の守護霊の保護下にある子供である。彼は妻を妬みのこもつた目で監視し、前より一層つらく当る。1年間というものは母親と赤ン坊は一緒に家にとじこめられる。この期間は子供はまだ母親のものである。

しかし、手足がしつかりしてくると、父親は早速子供を自分の方へとりあげてしまう。母親は妊娠中の方々から世話になつたのでそのお礼働きにいかねばならないため、いやでも子供を父親に任せることになる。父は家の中で一番偉い人物で、母に命令したり撲つたりするので、子供の方でもごく小さいうちからその雰囲気を感じて、母を馬鹿にし父にばか

りなつくようになってしまう。父親はいつでも子供にかまけていて忙がしくて遊べないことなどないが、母親には余りに仕事がありすぎる。彼女は家の中の煙たいところにはいなければならず、カヌーの島（男の仕事場）への出入りも禁じられている。父と母との対立ではいつでも父が勝つに決っているのである。こうして子供と父親との親密化はすんでいく。

やがて母がまた妊娠し、1年間彼女のものであるもう1人の子供が生まれようとする。母親は、父親と子供をとりあうのを諦めて離乳をはじめ。子供にすれば今までずっと甘やかされ、泣けば乳房にすがれたのに、こんどは母親の方から自分を避けるのですつかり気を悪くし、ますます父親に親しむこととなり、新しい子が生れる日には殆ど完全なお父さん子になっている。母親が新しい子にすつかり手を奪われている間に、上の子は父と一緒にくらす、食事の時も、水浴も遊びでも父はまめまめしい召使の役に甘んじていてくれる。この期間に子供のうえに築かれる父親の地位は確固たるものになる。これが新しい子が生れる度に繰り返されるのである。母親の方はお産を喜ぶ。たとえ僅かな月日でも自分の子をもてるからである。

子供に対する男の態度は実子であろうと養子であろうと何ら差別はない。一度子供を養子にやれば実の父母は子供への一切の権利を放棄したことになる。その子供の本当の父は養父たゞ一人である。⁽⁵⁾

母系は明かに辿りうるから母系の尊重は当然であり、父系には疑いを容れうるので系統の根柢としては薄弱だとする見解も多いが、マヌスの場合はこれに明かな対照を示している。⁽⁶⁾ 生理的な父性というものは理解されているが、しかしそれは彼らにとつて興味の外である。だが母性の方は話が別であつて、実子にせよ養子にせよ父親の権利は一樣であるけれども、母親の方は血統上の権利以外何の切り札も与えられてはいない。⁽⁷⁾

要するにマヌスの家庭生活では妻及び母親の地位は非常に気の毒なものである。実の子でありながら母親と子供の繋りはいつ決裂するかもしれない状態にある。子供は絶対に父のものなのである。

Ⅳ 初期の訓練（教育）

A 身体的訓練

マヌスの子供はその人生の第一歩をまず水に親しむことから始める。幼児は薄い板敷の上に寝かせられて熊湖の水面に満ち干る潮に目をみはる。生後9～10ヶ月になると、母や父は子を抱いてベランダの涼しい日陰に坐り、通りゆくカヌーや水中にたつ村の情景になじませる。満1才位で母親の肩車にのつてその喉をしつかり抑え、足元の危い階段を上り下りしても決してその手を離さぬよう用心深く掴んでいることを覚える。カヌーが揺いで水中に放り出されることも、家の床板の大きな隙間から海に落ちこむことも時にはあるが子供は安全に母の手に拾いあげられ溺死する例はきかないし、後になればそういう時のショックは痕かたもなく消えるらしい。あつぶあつぶしたり、冷い水にはまつたり、ぬらぬらする海草に足をさらわれたりいろいろな目に遭うものの、自分の住む世界の安全さを疑うようなことはない。生れおちるとすぐ水上生活をしつているので水上はわが家も同然である。両親も決して子供を不注意に扱うことをしないので、子供もその環境に何ら物怖じすることなく立向う。こうして安全感（環境への慣れ）の育成がこゝでの教育の第一段

階となるのである。

大きくなるにつれて子供は干潮の時水中を歩き廻り、柔かな泥土の上で遊びながら徐々に泳ぐことを覚えていく。親たちは注意ぶかく見守っているが、より深い判断力とより大きな注意力を学ぶ手段となるような小さな過ちは看過しておき、後々までも子供を怯えさせたり、活動性を妨げるような深刻な過ちを犯すことを放置しないだけである。3才にしてすでに泳げるようにとの期待は私たちの目からは或は無理ともみえるが、実際は彼らのもっている体力を最大限に駆使することを冷静に求めているのである。一通り泳ぎになれると小さなカヌーをあてがはれ、年上の子供をみならつて櫂で漕いだり棹を押ししたり、一日をこの小さな自己の領分で気儘に遊びくらす。

さて次の段階は本物のカヌーの操り方を覚えることである。カヌーの真中に大人たちが坐り、3才位の子供が身の丈の3.4倍ものカヌーを棹で操つて苦心惨澹しているさまは、甚しい両親の不精か児童酷使かに見えるが、子供に骨のおれる水上生活の実察を体験させる意図に外ならないのである。こうした訓練のあげる効果はマヌスの子供たちが水を充分に我ものとし、少しも水に恐怖感を懐かないということをもつて証明される。泳げない子供は私たちの社会での歩けない子供のようなものであつて全くの劣等児なのである。

「カヌーをしる」「海をしる」ことは後で述べる「家と火をしる」ことの直後にくる。カヌーについての知識は、身体の平衡をとりながらの正確なカヌーの操作、処理、操縦技術などをしることで、航海中の知識は含まない。「海をしること」は泳ぎ、飛込み、潜り及び鼻や喉に入つた水の吐き出し方などの知識を含む。

マヌスの厳格な鍛錬法では一つ一つの進歩や勇敢な試みがその度毎に褒められるが、余り向う見ずな企ては穏やかに忘れるように仕向けられ、小さな過誤は見逃され、重大な誤りは厳しく罰せられる。これらのおかげで子供は運動神経の完全な均齊を保つことができるようになり、槍投げのように少数の者だけが特に技倆の優秀さを誇る技を除けば、生れつき才能の劣つた子供は区別し難い。泳ぎ、櫂ぎ方、棹、木登りなどの日常活動において彼らは一様に平均した高度の優秀さを示しているからである。こうして生活様式が寸時の油断も許さぬマヌスにあつては、一日も早く自分の身体を自分で扱いうようになることが期待され、身体的能力の習得のために子供も大人も全力をあげるのである。

B 知識訓練

生れおちると同時に子供の環境の一部をなす「家と火」についての知識を習得することは、彼らが水というこの社会全体の環境に慣れ親しんでいく過程と平行している。

「家をしる」とは不安定な床板の上の歩行、梯子や柱を昇り降りする技術などの身体的能力の習得と共に、汚物塵芥の処理、家財道具の尊重、屋内を清潔にすることなどを覚えることである。⁽⁹⁾

「火をしる」とは火の危険性をしりその取扱い方や火を絶やしてはいけないことなどを理解することが主な点である。⁽¹⁰⁾

子供たちは5.6才迄に以上の「家をしる、火をしる、カヌーをしる、海をしる」という四部門の訓練をうけ、それを習得する。

男の大人や年上の男の子たちは子供と遊ぶのが好きなので、子供はその間に自ずと話すことを覚える、マヌス人は同じことを繰返すということを好み、遠くへいくことを「行く行

く行く」といふ、非常に大きいことを「大きい大きい大きい」という風に表現し、しかもそれに抑揚をつけて歌の様に調子よく繰返す。これは子供が言葉を覚えるのにこのうえない雰囲気を作るものである。子供の覚えのない片言にも大人は根気よく相手になり、同じ言葉のやりとりを倦まず繰返している。大体マヌスでは語彙もせまく、表現も徒らに現実的でニュアンスに乏しいのだが、こうした繰返しによる多弁を非常に好み、子供にも奨励する。この傾向は成人になつてももちこされ、一つ動作にも始終言葉の伴奏がつけられている。言葉ばかりでなく大人の動作もやはり身振り手真似でよく模倣され覚えられていく。唄、踊り、太鼓打ちなどみなそうである。

C 社会的訓練

家財を神聖視し、財産を失うことを人が死ぬ程に悲しむマヌスでは、家財に対する尊敬ということをも物心つく頃から子供に厳しく教えこむ。歩けるようになる前でもひとの物に手を触れればとても叱られる。良い子供とは決して何にも手を出さない子供のことである。破壊行為や粗相はどんな些細なことでも罰をうける。人の物を盗つかとか、壊したとかいう汚名は彼らにはそぎようもない深刻なものである。また子供は歩けない頃から決して用便を人に見られてはいけないし、一つのカーに男女が同乗するような時は非常に作法がやかましい。子供たちはこの嗜みと羞恥の雰囲気に慣らされ、親が顔を赤くするような恥曝しをもうしないという安心がつくまで子供は厚いチクチクする被布ですつぱり包まれる。

しかし社会的な訓練はこゝでもう卒業なのである。財産を損わないこと、恥をかかないこと、この二つが子供に対する社会的倫理的訓練の重要条項の全部である。彼らは口を控えることも、気分を抑えることも仕込まれない。親を敬うことも伝統に誇りをもつことも教えられない。その日常生活を縫う細い恥辱の糸のみが僅かに彼らを拘束するだけである。あの厳格な身体的訓練に比べてこの社会的訓練の寛大さは、この社会の教育の基本的特色であり、彼らの性格をしる鍵でもある。

V パースナリティの形成と発達

マヌスの子供の世界を支配するもの、それは遊びの生活である。彼らはその遊びを通じて身体的能力と身体的積極性とを身につける。しかしそれはごく単純な空想力の欠けた遊び一例えば蹴毬、角力、輪遊び、競走、競漕一ばかりである。遊びの場としての環境に不足はなく、大人の放任は何ら子供たちの活動を妨げはしない。また大人の生活の真似をしようと思えば、どんな方面の真似でも道具には事欠かない。しかしそれでいながら売買遊びや物々交換遊び、航海ごっこなど大人の生活の模倣をしようとはしないのである。これはマヌスの子供が大人の生活から全く切り離され、子供の住む世界は子供だけの世界として大人の生活とは異うところに標準をおいているからである。大人にとって非常に大事なこと一取引き一も子供にとっては何ら興味をそそるものとはならない。

子供たちの話題もまた見たことや経験、事実の有無などという非常に現実的なことばかりで、それに空想の飛躍をつけ加えることもなく、大人も子供にお伽噺や謎や考えもののような遊びを教えたりはしない。ただ事実を重んじ、詳細な叙述を重んじ、細部までの正確さを重んじる慣習のために、空想的なことはみな抑圧されてしまうのである。私たちは

豊かな伝説や、宇宙現象を人格化した歌や話、謎々、神話などで子供心を満たし、また子供はすべて本質的にそういうものへの果てしない興味をもっているかに考えているが、マヌスでのこの事例は私たちを驚かせるに十分である。マヌスの大人たちは色々の空想を描くだけの背景を与えていないので、子供は現実的な自然そのままの見方しかしない。それにマヌスの言葉は冷淡な露骨なもので、言葉のあやとか比喩など全くない。実際子供の空想を駆る言葉でもなければ、大人の詩情をひきだす言葉でもないのである。

これはまことにマヌス社会の現実性一日毎ただ取引きということであけくれ、勤勉と経済的成功とが人間の価値を計る尺度である社会一の反映であるとみられよう。そして子供の遊びの生活が気の利かぬ何ら空想の彩りのないものであるというのも、それは彼らの知能の低さを示すのではなく、彼らの育てられ方の特異性を語るものであるといえよう。Meadの指摘する通り、宇宙を擬人化することは本来子供の思想の中にあるのではなくて子供の住む社会が与える一つの傾向なのである。そうした傾向は自然に生ずるのではなく、言葉や民話、そして大人の子供に対する態度などによって促されて生れてくるのである。

こうした遊びの世界から子供たちがだんだんに大人の生活へと足を踏みいれていくその過程に、男の子と女の子とが社会的にも明かに差をみせてくる青春期が存在する。

女の子は5.6才までは男の子と同様、何のこだわりもなく父親についてまわりますが、それを過ぎるとそろそろ戒律の域に入ることになり、忌避すべき関係にある少年たちを避け、男性の仕事場への出入りを禁ぜられるようになる。だんだんに父親からも離れ、構われなくなると、彼女は母親と同族の年上の女たちに同化しはじめる。思春期に達すると娘たちは遊びをやめ、気儘な交際も断念し成人としての責任ある生活を始める。といつてもそれは新生活の開始を意味するのではなく、ただ元の生活から遊びの要素を徹底的に除いたものなのである。つまりこの期間は準備の期間であり、自由に遊び廻つた子供時代と、結婚による束縛の時代とに跨る興味も少い架け橋の年月である。しかもマヌスでは将来の夫は既に定められているので、彼女は恋人を求めすることも許されず、他の娘との交友もできず、ただ何とはなしの受身の姿勢で次の時代を待つているうちに、いつしか背丈も伸び姿も女らしくなっていくのである。

男の子は女の子に比べるとずっと気儘である。母親の顔を叩いたり、父親に口答えしたり、云うことをきかずに遊びまわってきた男の子は、これらの不服従、非協力、無責任をそのまま少しも修正せずに成年期までもち続けていく。12~15才位の間で家の経済の都合のよい時に耳に孔をあける式を挙げる。しかしそれによつて今迄になかつた新しい義務を加えられるわけでも、新しい知識を授けられるわけでもない。遊び仲間のところへ帰れば前と同じに跳び歩いている。また白人のところへ出稼ぎに行く風習がさかんになり、これが少年たちにとつて心躍る大きな冒険である。それは彼らを珍しい経験で夢中にさせる異国の生活ではあるが、しかしマヌスの村に帰つてからの生活とは何ら共通したところのない世界なのであり、村の生活に対する何の準備でもなかつたのである。つまり若者たちに少しも変らずに自分の村へ帰つてくるのである。

このようにして育つてきた若者に対しマヌスの社会は意識的に、または集団的行動によつて対処するとかはしない。しかしこの文化が用いる無意識的攻勢は意識的なそれより遙かに巧妙なものである。社会は若者を支配するのに羞恥心を利用する。羞恥の感情は3才

頃には十分発達しそれ以後は大した進歩をみせない。子供たちはその身体を耻じ、排泄を耻じ、或る種の親族の前でものを口にするのを耻じる。大人がこれらのことにショックを受けたり耻かしがつたりするのをみて子供も反応するのである。大きくなるにつれて、これらのもじもじや当惑はだんだんと反射的になつていく。愈々、若者が結婚しなければならぬ時期がくる。結婚したら妻を養わねばならぬのみか、妻を迎える費用をだしてくれた伯父たちのいいなりにこき使われねばならなくなる。彼は自分の権利を主張しうるための何の支払いもしていないのである。彼らのために魚を獲り、市場へ行き、彼らと話をする時には声まで小さくしなければならない。その一方には伯父たちが自分の結婚費を完済してくれる迄は、妻の親類の男たちの前でも羞かしい思いをなめる。どこへいつてもおずおずと歩かねばならない。以前は朗かで甘やかされていたのが、一たび結婚した今では大人の中で一番つまらない一番馬鹿にされる存在になつてしまった。これは若者にとって何という大きな衝撃であり、変化であろうか。

彼の周囲にいる年上の男たちは、経済的組織を習得し財政的後援者を離れて独立独行し自力で贈物のやりとりをすることのできる人々と、経済的に失敗したか、或は未だに独立できぬ文なしで弟たちに暴君のように振舞われ、家族を養うため夜毎魚を獲らねばならぬ人々との2つの型に分かれる。全能と叫喚の赤坊時代、騒々しい自己満足的な、大人のいうことを決してきかぬ子供たち、それからおずおずした少女たちと子供時代の我儘をそのまま持ちこして騒いでくらす少年たち、そしてその上に経済的に無力の若夫婦、とマヌスの社会はこうした幾つかの層ができ、夫々に顕著なタイプの性格がみられるのである。更に35才以上になると、そこでは経済的に失敗した哀れな一群と、事業に成功し羽振りの良さを誇る人々とはつきりとわかる。彼らは貸した金を返さぬ相手には地団太踏んで怒鳴りつけ、気にいらぬことには所構わず癪癪をおこす。それはさながらかの横暴な子供時代の再現である。一時抑圧されていた全能感への欲求が甦えつてきたのであろうか。

こうして「社会は勝つたのである」。なるほど子供たちは楽しい世界に育てられた。しかし一たびその子供が一人前の大人になると自尊心をもつことさえ許されない。もしこれがもつと早くから始められれば、その方法もこのように唐突である必要はないのである。初めは思う存分羽を伸ばしておき、愈々大人の生活に仲間入りした時にぐわんと一撃加えて、無力と耻辱の谷に突落す。かの暴君時代に我儘をいい、いうことをきかせた大人たちに見事に仇をとられたかたちである。この苦しい泥沼から浮びあがる時には、男も女も子供時代の楽しい痕跡はすべて失い、烈しく横暴なれつきとしたマヌスの大人となつていく。かつてのよい特徴がみな消滅してしまうというの、つまりは社会がそれらを少しも必要としないからであり、それらを表示することが社会的に有益なこととは認められないからなのである。

マヌスの家庭では小さい子供たちに対する兄弟姉妹の関係は決して重くみられていない。サモア(Samoa)では子供たちがめいめい自分のすぐ上の子に頼り、また上の子はすぐ下の子の面倒をみるが、マヌスでは各々が父⁽¹¹⁾に対し、次には母に対して自分の関心を集注する子供たちの集まりなのである。優しい父の庇護の下にくらす7.8才までの楽しい生活はその子の成人後の性格に甚大な影響を与える。マヌスの子供は一樣に優れた身体的能力を示し、皆伶俐な子供で知能程度もほぼ平均しているが、その反面個性の相違は極めて早くから現われる。サモアでは子供たちは家族の者よりも遊び友達の方に似てくるが、マ

マヌスでは子供の個性と父または養父の性格は生々しいほど一致している。実子にせよ養子にせよ、強い意志力と人の上になつた素質をもつた者の子供は、攻撃欲が旺んで話声も大きく態度物腰も自信ありげであり、さながら父親そのままに礁湖の中で我もの顔に暴れ廻る。一方内気で金もない年若の父をもつた子供たち、或は年長者の子供でも父が社会的にも不成功者である場合は引込み思案で口数も多くない。この両極端の中間にくるのが、年こそ若く一時的には社会的勢力を失墜していても、やがて経済的に独立しさえすれば斗争心で一杯にならうという者の子供である。同じ兄弟でありながら父が社会的に劣勢の時に育つた子と、経済的に力を得てからの子とでは後者の方が遙かに強烈な個性を示すという事実—マヌスでは後から生れる子ほどきかなく、しつかりしている—（兄弟でも育つた環境で性格が異なるのは他の要因—遺伝的差異、偶発的事情などを考える余地もあるが）、又若年者や不成功者の子供たちが一樣に或る型の個性を現わし年長者や成功者の子供が別の個性を現わすという事実は何を物語っているのだろうか。マヌスでは「またいところ」間の強制的結婚と、更に祖先を共有することの多い小部落の宿命としての近親結婚が頻繁となるので、いきおいマヌスの子供たちは総て同様な可能性をもち、著しい差異を発展させる動機となるものは環境だけということになるからだ。Mead は考えている。つまり遺伝的条件にもさしたる差がなく、教育の機会や内容などもほぼ一樣と考えられるマヌスにあつてしかも子供たちはその性格が形づくられる人生の最初の時期を、父親との異常なまでの結びつきのもとに過すことを考えれば、マヌス人の性格を育てるものは大人の、とくに父親の性格に外ならないといえるのであろう。

マヌスの子供の父に対する態度、父の子供に対する態度は、マヌス人と靈魂との関係に極めてよく投射されている。マヌスの宗教は心靈信仰と祖先崇拜の特殊な混合物であり、死んだ男子の靈魂はその家系の監視者となり、守護者となり死後の専制者となる靈魂たちは大抵は最近死んだ人の靈で、その顔さえ今なお生きている人々の記憶に新しい。けれども靈魂の世界は大人の価値のみが通用する世界で、本質的に子供とは関連のないものである。子供のうちはただ面倒なだけで何の興味もなかつた靈魂の存在を慕うようになるのは父の死後のことである。しかも今迄経験したことのない最も苛酷な現実が結婚と同時に彼を襲い、其処にはもう父の温い愛情はないという時（マヌスの子供にとって一番のショックは父を失うことである。マヌスの父は概して若死であつて多くは息子の結婚の日をみぬうちに死ぬ）彼の心は靈魂を求める。その靈は父の靈であることも、或は父と同じく優しい監督の眸をなげてくれる家族の靈であることもある。彼はこれらの父性愛的靈魂の保護の下にくらし、靈魂たちは彼のために出来る限りの面倒をみ、又彼が道德上の義務を欠いた時は之に罰を与え、その失敗を償えば許してくれる。彼は靈魂に対して曾て父に対したと同様我儘一杯に振舞う。子供の方だけが愛着をうける権利を主張して、子供から父に対しては愛情を報いる義務を認めなかつた一方的な愛情関係とそつくりそのままの態度が靈魂に対してもとられるのであつて、マヌス人は彼らの守護靈を眞の意味で愛さない。幼年時代甘やかされた子供であつたように、彼らは靈魂に対しても我儘な子供で、靈魂のしてくれることは総て当然のこととして受取り、意見されれば腹をたてるし、十分に守護してくれる力のない靈魂は遠慮なく追出してしまふのである。

Ⅶ 結び—教育と文化—

私たちはマヌスの子供が大人になつていくまでの過程のあらましをここにみたのであるがその事例は今さらながら興味をそそる。彼らが子供に、将来必要な身体的能力を有無をいわさぬ確実な方法で植えつけ、彼らの唯一のモラルである財産への尊敬の念を叩きこむのをみた。そして大人の生活に無弱心で、自ら進んで将来の生活の一端を担うなどという意欲の片鱗だにみせなかつた子供が、やがて結婚を境いに熱心に大人の生活に参加し、マヌス社会の価値を追求して躍起になつていくさまをみた。更に死者の超自然的力を軽蔑していたものが長じては靈魂たちの意を迎えるに懸命となり、子供時代に一方的愛情を要求し、与えることを知らなかつた自己中心性が、やがて蓄財と成功のみを追う個人本位の貪欲性へと発展していくのをみたのである。この教化過程は全く完全である。その方式は不規則な非組織的なものであり、一見無計画無思慮な方法にみえながら、将来マヌス人たらんがために必要なものはただの一片たりとも伝え忘れられてはいない。マヌスの親は伝統に愛着をもつことも、誇りを感じそれを担おうとする態度も教えようとはしない。しかし逆説的ないい方をすれば、そうすることにより最も確実にマヌスらしさを次代に伝えているのである。伝えられる文化が単一であれば、伝える方法はどうかであろうとも結局その文化はそのまま後代に伝承されていくということは記憶さるべきである。子供の順応力は外面からの刺戟より遙かに強い。教育とは、Meadのいう通り、「成長していく個人が徐々に社会文化を吸収していく過程をさす」のであつて特定機関での上から与えられる事項のみでは決してない。教育者とは社会の文化全体である。その社会が伝統を子供たちに伝えるにあつて、こんなくだらないものという風な投槍な態度で与えるか、それとも微細に亘つて深い注意と心遣いをもつてするかによつて、その子供が成長の暁にそれぞれ異つたタイプの文化を有するようになるのである。マヌスのように大きくなる迄は子供を殿様扱いしておきながら、ある時期に達すると耻辱の鞭を加えて、今迄崇高なものとも価値あるものとも教えておかなかつた生活に無理やり押込めるということが、果してどういう結果を招ぶか、私たちの社会での教育を反省しながらよく考えてみたい。このマヌス社会の貴重な記録から私たちは、教育ということの真の意味と、それが社会の文化といかに機能的に関連しあつているものであるかをしることができる。そして私たち自身、進んでその文化を担い、子供たちにはそれを誠意をもつて伝えて、彼らが大人の生活を不平満々で引継ぐことのないような育て方をする必要のあることを痛感する。「与えられた文化を永遠に遵守することは何れの社会においても大部分の人の避け難い宿命である」からである。

註

(1) 幼時の経験が後の性格形成に大いに影響のあることは通説となつているが、とくにそれを重視し、初期の教育の重要性を強調するのは、Fromm, Kardiner, Horney, Erickson らのフロイト左派といわれる人々である。

(2) "Growing up in New Guinea" 1930.

この他 Mead が編集にあつた "Cooperation and Competition among Primitive Peoples" (1937) の中に The Manus of the Admiralty Islands の章がある。この小稿は上の二つの記録に拠つた。序でに述べておくと Mead が "Growing up in New Guinea" を著わした動機には、マヌス社会での教育の実態の観察を通してアメリカ教育の現状への批判を試みようとする実際的な要請が働い

いたとみられるのであつて、同書のかなりの部分をその問題の記述にあてている。

(3) アドミラルティ群島の住民は水上生活のマヌス人、大アドミラルティ島のウシアイ人、小島に家を建てて住み丸木舟を用いるマタンコル人に大別できる。ウシアイ人は農耕生活を営み木材を製作し、マヌス人と一番取引関係がある。

(4) マヌス人は烈しい労働のためか、平均寿命が短く、とくに男子は若死するので、祖父のいる家庭は稀である。

(5) マヌスでは養子の風習がさかんである。ペリ村の子供の4が養子で、その中の半分は孤児であるという。

(6) 子供は精子と凝固した経血とからできると土地の人は信じている。

(7) 未開社会における父性の認識については Malinowski “The Father in Primitive Psychology” (1927) に興味深い記述がある。

(8) カヌーについての知識は、正確な棹の操作、軽い疾風の中も操従できる技術、張出し浮材を柱に挟まれずに家の下を走りぬけ、密集したカヌーの群からうまくぬけ出し、カヌーの船首船尾を交互に揺り動かして水を掻きだすことなどが出来れば一応修了である。

(9) 「家をしる」一唾を吐いたり、小用を足したり、屑を海へすてる時は床板を外すこと、床の上の家財道具はすべて大切にすること、棚や、重みに耐えぬ場所に上らぬこと、家の中へ泥や屑をもちこまぬことなどの理解

(10) 「火をしる」一火は皮膚に火傷をおこすものであること、茅、木の葉、藁をもすものであること、いぶつている燃えさしも吹けば又燃えだすこと、火桶から火をうつす時は細心の注意を払うべきこと、火は水で消すことなどの理解

(11) サモアについては Mead. “Coming of Age in Samoa” 1928.